

No. 111号

OB・Gニュース

二〇一六年七月一日

発行責任者

社民党がんばれOB・G福島の会

eメール hurya.michitatsu@orange.plala.or.jp

しおれても

水で再生

一番味き

(シルバernet川柳)

「安倍政治を許さない」を掲げているのか

試験の憲法

ノンフィクション作家・澤地久枝さん

毎月3日午後1時、国会正門前に立つと決めている。

3度の大手術を受け、ペースメーカーを埋め込まれた心臓。数年前に脳梗塞(こうそく)に倒れた体。それでもノンフィクション作家、澤地久枝さん(85)は国会前行く。

「安倍政治を許さない」と俳人、金子兜太(とうた)さん(96)に揮毫(きごう)してもらったポスターを両手で掲げるために。



(作家の澤地久枝さん=内藤絵美撮)

「安倍政治を許さない!」とシニプレヒコールが響く中、澤地さんは一人黙ってポスターを掲げる。「デモやシニプレヒコールが苦手なの。でも私のように、憲法は守りたいけれど大勢の人と何かをしたり、大声で叫んだりするのが苦手という人は多いと思う。そんな彼らが顔を上げてくれたら、この国の政治は変わると思っている。だから、黙ってできる、一人でもできる「一斉行動」を思いついたのだ。参院選は「一人一人の勇気が問われる」と考えている。意思を表明する勇気だ。「安倍政権は『憲法改正』を争点から隠していますが、改憲勢力で3分の2の議席を獲得すれば必ず改憲に動き出します。声を上げなきゃ、この国のかたちは変わってしまう」。それから小さく息を継ぎ、私の顔を見据え、きつぱりと言った。「今が、後戻りできない最後のチャンスなんです」

(毎日新聞2016年6月16日東京夕刊より)

安倍政治を許さない

「社民党」・「二議席以上の確保を!!」

私たちが、今やること、やらなければならぬ事。それはあの「戦中」と「戦後の荒廃」を知る者の一人として、また今日の自・公政治の「格差社会」を体験している者として参議院選挙はこれまで以上の重要な意味を持つ。そのことを澤地久枝さんの姿と重ね合わせて考えたい。

大きなことを望む必要はない。澤地さんが述べているように「できることを、たとえそれが小さいことであっても確実に実行」することだと思おう。残念だが足腰も弱ってきている。免許証を返上した方もいるだろう。配偶者が寝込んでいる方もいるだろう。そこで皆さんと確認し合いたい。だからこそ工夫をこらして、一寸努力をして必ず投票に行く事である。同時に配偶者に、そして子どもや孫に、また日頃付き合っている知人、友人に「比例区は社民党」と手紙で、電話でお願いしよう。

麻生副総理は「90になっても老後が心配とか訳の分からないことを言っている。高齢者はその金は使わなきゃ」との発言があった。国民の実態を知らない政治家であり、それが安倍政権の「格差拡大の経済政策である。何としても自・公に、改選議席の過半数を与えてはならない。そのためにも「社民党・二議席以上の確保」が必要。皆さんのご支援をお願いしたい。

社民党がんばれOB・G福島の会・

会長 杉原 二雄

『国民主権、基本的人権、平和主義を 削除しよう!』

…自民党憲法改正の誓いをたてる…

「私たち日本人は、この美しい国に生れ、勤勉に働き、田畑をたがやし、子どもも一生懸命にしつけ、いい教育を与えて、時には国を護るために命を投げ出し…」高市早苗総務大臣がしなやかに歩き回りながら一人舞台よろしく演じるセリフの一部である。時は、平成24年5月10日、永田町の憲政記念会館における「創世『日本』東京研修会」の場面である。

たまたま一人のブロガーのタイトルを目にする。それは「憲法改正誓いの儀式」というものであった。そして、そのタイトルを開いてびっくりした。まず最初に目にしたのはそこに自民党の中樞を牛耳る面々が並ぶ、恐ろしき「式典」の全貌が明らかになっていった。そして舞台の中央には「水を得た鯉」を思わせる安倍晋三首相の姿があり、その隣には桜井よしこ氏が着座をしている。

さてその面々であるが「創世会メンバー」と言われる現・元大臣を含めた要人がずらり。そして次々と立って演説をする。

内閣総理大臣補佐官・衛藤晟一「いよいよほんとに憲法を変えられる時がきた。でも、これ以上伸ばすことはできない。それを受けて元法務大臣・長勢甚遠が後に続く「憲法草案というものが発表されました。正直言って(草案に)不安があります。一番最初にどう言っているかというですね。国民主権・基本的人権・

平和主義。これは堅持するっていつているんですよ。この二つを無くさなければですね、ほんとの自主憲法にはならないんですよ。たとえば人権がどうかいわれたりすると、平和がどうかいわれたりすると、おじけづくじゃないですか。それは、我々が小学校からずっとずっと教え込まれてきたからですよ」
続いて外務副大臣・城内 実「え、日本にとつて一番大事なのは何かといいますと、私は皇室であり。国体であると 常々思っております。

そして、安倍首相の「偉大なる側近」である自民党政務調査会長・稲田朋美は「え、国防軍を創設する。そんな憲法草案を提出いたしました」と述べている。文科大臣と言えば日本の教育行政の長である。その元文科大臣・下村博文は「私たち自民党は、大学入学前に自衛隊等の体験を義務化したいと思えます」という言葉を発している。

何と言っても「極めつけ」は元総務大臣・新藤義孝である。「でも、今必要なのは行動すること、実現させることだと思います。みなさん憲法改正をしましょうよ。ならば、いま奪われている領土!取り戻しましょうよ!北方領土、竹島、主張するだけでなく行動しなければいけないと思います。さらには、尖閣を使っていきましょうよ!軍事利用しましょうよ!」と。この政治家の祖父が硫黄島激戦部隊の最高司令官であることは誰もが承知をしている。

安倍首相は、参議院選を前にした幾つかの討論の中で「憲法改正」について次のように語っている。「憲法調査会を開催し、静かに論議をしてもらう。それをもって国民投票にかけよう。憲法を改正するのは国民であります」と。しかし、この「儀式の誓い」を見る限り、そしてその中心に安倍首相が存在している限り、その発言はまやかしとしか言いようがない。ここに自民党が狙いとしている「憲法改正の本質」が見えてくるというものである。

この国を彼らはどこへ持つていこうとしているのか。その狙いは明らかである。怖すぎる。裏と表とは違いすぎやしないか。是非ともパソコンを持っていらっしゃる方は検索をして欲しい。そして広めて欲しい。この画面がいつまで存在しているか。だから今すぐに見て欲しい。

そして、このニュースを家族に、知人、友人に広めて欲しい。参議院選で野党が54議席を獲得しなければ、自民党は改憲の発議をするだろうことを危惧する。自民党に過半数与えてはならない。



発言をするのは稲田政調会長、安倍首相も拍手を!!

「妹を見捨てられない

年寄りも早く死ねといふ人が

・「いかに生きるべきか」の選挙結果を出したい・

二人の老夫婦がいる。今やこのような世帯は当たり前になってきている。その実態の中で次の二つの事例があるので報告したい。

老夫婦が「要介護1」の妹さんを引き取る

「妹さんたち夫婦は食料品を扱う店を営んでいた。配偶者に先立たれ1人で頑張っていたが、転倒を期に足腰が弱り生活が不自由となる。それを見かねた姉が同居」を勧めた。

6月2日の毎日新聞の記事を見る。「生活保護半数が高齢世帯・うち9割が単身赴任」という見出しのもとに、3月時点の生活保護受給者は163万世帯で過去最高ということを知っている。そこで「公的年金」に触れる。給与所得者の多くは「厚生年金者または共済年金者」である。毎月保険料を掛け続け（半額は雇用者負担）退職後現役時代の平均年収に比例して年金を受け取る。しかし、前記した自営業の皆さんを保障するものは「国民年金」である。そして保護世帯の47%が、この国民年金の受給者であり、その月額が4万6597円（厚生労働省14年度調査）ともつけ加え報じていた。

妹さんの現役時代だけだけの収入があったかはわからない。また自己責任を目的とする民間の保険の加入がどうであるかを問うつもりもない。仮に、その用意をしていたとしても「晩年の一人暮らしの生活」が保障されるか

と云えば、その保障のある高齢者は、極めて少数であることは現代の常識である。

そこで姉さんの悩みは次の通りであった。「要介護1であるから施設介護は不可能だ。私たちと同居ということでは訪問介護を受けることも難しいと聞く。また私たちもいつまで面倒を看られるか、私たちが先は不安でいっぱいだ」と。「近くに家を探し、そこに転居し時折訪問する。まだ一人で生活はできるでしょう」と。いわゆる「近居別居」の勧めであるが、私はその言葉を飲み込んだ。それを察知したのだろう「それも考えた。そうすれば生活保護の申請も可能かも知れない。でも・・」という言葉が帰ってきた。

仮に申請しても受理されるか、どうか。扶養の経済能力を持っている姉夫婦の存在は審査の対象になるだろう。だが訪問介護、あるいはデータービスのメニューなどは組めるだろう。問題は家賃も含めた妹さんの一人暮らしが経済的に成り立つのか、どうか。そして、ぽつりと姉さんはつぶやいた「一人だけの妹です。家で何とか面倒を看てあげたい。しかし、何も言わないけど夫の手前もある」と。そうだと思う。いずれはくるだろう自らの「老々介護」は避けて通れない。

「年寄りも早く死ね」といふのだろうか

「14年度の介護給付費8.兆円」その多くが訪問介護などの「居宅サービス」という記事を見る。（毎日新聞6月15日）

2014年の年末総選挙の時であった。町内で二人の女性との立ち話をする機会があった。70代であろうか。その前に「売家」の看板が立てられた立派な家があった。私はその家を記憶していたので「ここの方はお年寄り二人でしたよね」と尋ねる。それに対し「奥さんがこの春に亡くなり、しばらくしてご主人が娘さんのところへ行ったようだ」との言葉が帰ってきた。そして「もう年寄りは早く死んでしまえと言ふことだね」と吐き捨てるような言葉がお二人の口から飛び出した。私は「ところで今度の選挙は」と尋ねた。するとお二人とも地元の自民党候補者の名前を上げた。「早く死ねといふのか」との怒りの言葉を述べながらも「時の政権党の自民党をより頼みとす。あるいは他党（候補）はその受け皿にならないと見るのか。今までもずつと入れてきたからそれ以外は考えない」ということなのか。「妹を看る姉」「早く死ねといふことかと吐き捨てる老女」これらを重ね合わせて、どうしても参議院選挙は「自・公」に過半数を与えてはならない。そのことをあらためて痛感した。



「バカノミクス」の切る!!

『公的年金運用の公表』

先送り』を考える



公的年金積立金の運用実績の公表は参議院選の後(7月29日)になった。国会の場でも「選挙前の隠し事の一つ」と野党から追及されていた。過去5年間の公表日は7月の初旬であった。今回公表を月末にするということは、8兆円にもものぼると推測されている膨大な「運用損出」を参議院選前には公表しないという選挙対策であることは間違いない。

まさにいつもの安倍内閣の常套手段である。このことは専門的な知識は持ち合わせていなくとも市民感覚で考えることはできる。

ここにある企業の2016年度の「企業年金基金」決算報告がある。掛金300億余の収入のある大手の基金である。そして130億余の運用収益を上げている。しかも退職者への給付を行い、そして「責任準備金・別途積立金・当年度剰余金」もきちんと積み立てている健全管理の収支である。もちろん株式での運用収益が軸となっている。

「株は売らなければ儲からない」

株は当然にして値上がりもするし、値下がりもする。株価が安いときに買い、高くなった時にタイミングよく売る。そこで利益を得る。この当たり前な運用のために情報の収集に力

を注ぐ。しかし、失敗することもある。巨額な資金を運用する厚生年金基金が、少しでも有利な運用を求めて投資顧問業者と契約をする。その結果巨額の損出をかかえ解散に追い込まれた基金がある。投資顧問業者が刑事責任を問われる事例も記憶に新しい。

個人の投資なら自己責任となるだろうが、年金積立金は「損をしました」では済まない。このことは誰にでもわかることである。ましてや、国民の公的年金積立金の運用を管理する「年金積立金管理運用独立行政法人」(GPIF)はそうである。そのGPIFの運用残高は140兆円ほどと報じられている。これまでのGPIFは積立金のほとんどを安全な国債で運用してきたが、安倍政権は抜本的に見直した。その内容は、国債の比率を60%から35%に低下させ、逆に国内株の比率を12%から25%に引き上げた。外国株を合わせると全体の50%が株式という構成になっている。

この運用方針は株価対策という批判が出ている。実際にGPIFはこの変更に伴い数兆円の資金を株式市場に投入した。そして空前の株高が演出された。結果して2014年度(通年)の運用実績は、15兆2922億円のプラス、2015年4〜6月期は2兆6489億円の運用収益を上げている。GPIFは自らの「買い」で株価を押し上げ、高い運用実績を上げたのである。思い出してほしい。この時期、NHKは終日「ほくほく顔」で街頭エン

タビューに応じる高齢者の姿を報じていた。まさにアベノミクスの「水を得た鯉」の姿であった。つまり高い株価は円安と並んでアベノミクスの象徴であった。

「売れば安倍政権の命取り」

しかし、このインチキを維持するために、「安倍政権に忠実なGPIF」がやったことは「買いすぎたので売れない」という点にある。株価がどうなるろうと、いつまでも「含み益」又は「含み損」はそのままである。これほど買いきすぎた株を売れば株価は直ちに大暴落する。それは安倍政権の命取りになる。だから「売るにも売れない」のである。この原理は今後も続くだろう。

そのことは逃げ足の速い巨大投資家や、高い自家株で収益を得た巨大企業の懐を肥やすだけであった。また一部の「目ざとい庶民投資家」を潤すだけであることは間違いない。

「ゴマカシミクス」を参議院選で叩く

晩年の生活を年金収入にしか頼ることのできない多くの庶民の不安は今後も続くだろう。安倍政権(GPIF)は「持ち株を売るにも売れない」大変な道を選択してしまった。そのことを隠すのが今般の「公的年金積立金運用」の公表先送りであり、夏の参議院選対策の一つであると受け止めれば納得がいく。いつまでも「ゴマカシミクス」に誤魔かされては行かない。そのことを「参議院選挙の一つの争点」として訴えたい。